
将来の夢かぁ...まぁ適当でいいでしょ.....

パラソル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

将来の夢かあ…まあ適当でいいでしょ……

【Nコード】

N5049Y

【作者名】

パラソル

【あらすじ】

12人の兄妹の真ん中の双子の兄の主人公が、学校の友達やらと将来の夢を考えたりする一応コメディー

誤字、脱字などの問題点がありましたら、気軽にお申し付けください

家族と朝食

「ねえ、あなたは将来何になりたいの？」

「ん〜、……まだ決まってるないな。」

「え〜。将来の夢は早く決めた方がいいんだよ。」

「将来の夢かあ……まあ適当でいいでしょ……。」

そう言って俺は空を見上げる

空には満点の星空があった……

ジュー……

お肉をフライパンで焼く音がする

そしてその音と共にいい匂いがキッチンに広がり、ついにはリビングまで匂いが広がった

そんな匂いを嗅ぎつけたのか一人の女の子が階段を

ダダダダッ

とかなりの全速力で降りてくる

そしてリビングのドアを開けて入ってきた

「はーらー減ったぞー！！」

これが今日の君の第一声か…

「はいはい、分かったから静かにしろ。近所迷惑だ。」

俺は朝からテンションが高い八女、卯月を大人の言い方でなだめる

しかし今日は興奮気味なのか、いつもこれで収まるはずが今日は全く聞かない（効かない）

「めしーめしー、はやくめしー！！」

これじゃあ料理に集中できない

俺は隣でいつしよに料理を作っている次女、霜姉に助けを求めた
すると姉は承諾し、注意し始めた

「こおらあ…。静かにしいなあさあい…。」

と微笑んで言ったのだが俺には鬼にしか見えなかった。

妹もそう思つて恐くなりだし、ソファーに座つて静かに座つた。て
かまず顔洗いに行け。起きて最初に来るのがリビングって

俺が料理の続きをし始めるとたん、今度は廊下を歩く音がして九女、
弥生がリビングに入ってきた

「どうしたの？こんな朝早くからうるさいわねえ。いつものことだ
けど。」

弥生はちゃんと顔を洗い服に着替えて、肩までの髪をしっかり整え
ていた。うむうむ、ベリーグッド。何も言うことはない

「これがもう日課だな。」

俺は呆れたような、なんか悲しいような顔を浮かべる

ダ…ダ…ダ…ダ…

今度はだるそうな足音がした

この足音は、長女の師走姉ちゃんだな

もう分かる。だるそうな足音と師走姉ちゃんがまとう、触れたら絶対キレますよって言うてる雰囲気分かる。……これで分かるって、僕すごいと思わない!?

俺が誉めてもらおうと自分にすぎた瞬間に師走姉ちゃんが入ってきた

「……誉め言葉に飢えたこうもりが。そんなに血（誉め言葉）が飲みたいのなら自分のを飲みな!!」

「はいー!?!」

俺はとつさにしゃがみこむ。師走姉ちゃんは俺の首があっただであるうとこを横一閃に斧を振っていた

コノヒトホンキダ

俺は恐くてその場にしゃがみこむ

しかし姉はそんな俺に同情することもなく斧をまた振り上げた

俺はここで死んでしまうのか?

13歳で死んでしまうのか?

そんなの嫌だ

誰か僕を助けてくれ

と俺は神様に祈る

その祈りが届いたのか、俺の前に光り輝く女神が現れた

「…喧嘩…だめ…。」

女神は俺の前に腕を横に伸ばして立ちはだかる

そしてまっすぐに師走姉ちゃんを見る

その目を見た師走姉ちゃんはまるで5・0のサッカーの試合の負けてるチームのように戦意を喪失した

「……分かったわ。早くごはん作ってね。」

とだけ言ってまた階段を昇っていった

ふう、どうやら僕は別名僕の女神でもある、三女の神無月姉のおかげで助かったようだ

「ありがとう、神無姉。おかげで僕はまだ酸素を吸えるようだ。」

「…どういたしまして…また何かあったら呼んで…。」

と、神無月姉は微笑んだ

私はこの笑顔でサーロインステーキを5秒で焼ける

次に俺は味噌汁に味見しながら少しずつ味噌を入れる

その時、廊下で

ドタドタッ

て音がした。誰だろう?と思ってリビングのドアを見ると誰もいなかった

あれ?って思った瞬間、誰かが俺の足に抱きついてきた

こつゆうことをするのは、末っ子の睦月だな

「お兄ちゃん、睦月顔洗ってきたよ。」

と、俺の顔を抱きつきながら見る。コレハヤバイ。カワイスギル

……いかにいかに。紳士としたことが

俺はもとの紳士の心に戻った

「そうか〜えらいぞ〜。じゃあもつすぐできるからリビングでちょっと待ってな。」

俺は睦月の頭を撫でながら言う

睦月は

「うん!」

と返事して席についた

そしてそろそろ料理の準備が終わるころに家族全員がリビングに集まる

そして霜姉が今日の朝ごはんのメニューを言う

「今日のメニューはピーマンと肉の炒めと味噌汁とごはんよ。」

まあこれが我が家では普通だ。みんなの家がどうかは知らないけど

ピーマンってゆう単語を発音した時に一人が拒絶した

「えー！ー！ー、ピーマンあるの？私食えないって〜の。ごはん味噌汁だけ食べよう。」

と言いピーマンと肉の炒め物が入った皿を自分から遠ざけた

この人は四女、長月姉ちゃんだ

長月姉がお皿を自分から遠ざけた瞬間、一人の子がそれをさえぎる

この子は七女、皐月だ

「ちよつと、皐月！何すんのよ！？」

長月姉はさらに皿に（どう？）力を入れて遠ざける

が、それを臯月姉ちゃんはさらに強く押し返す

「ちゃんと食べなきゃだめだよ！ちゃんと食べないからお姉ちゃんはいっまでも貧乳なんだよ。」

その言葉にキレたのか長月姉の目が本気になった

そして言い返す

「何よこの運動オンチ！運動しないで一杯食べるからそんなに太るのよ。」

？別に臯月は太ってないと思うのだが…。まあ長月姉から見ればそうなのかもしれない

とまあ言い合いが続きます。あーだのこーだの

このパターンはあれですね。はい、もう覚悟してます

臯月と長月姉が両方から押した皿はな・ぜ・か、宙にとび、私の頭にげきとーつ

・・・

「大丈夫か！？」

と五女の葉月姉ちゃんがふきんで俺の頭を拭いてくれる

すると自分も心配したのか、十女の如月も俺の頭を拭いてくれた

俺は2人にありがとうと言ったら一人は

「まあほっとけないからな。」

と返ってきたが、もう一人は

「か、勘違いしないでよ！？かわいいそうだったから拭いてあげたんだからね！？」

って返ってきた。ツンデレダー

とかとかしてる間にだんだん食べ終わる人が出てきた

俺は食器を台所に運び一旦部屋に戻り準備をする

ちなみに弁当はもう作ってある。朝ごはんの前に作っておいたのだ。もちろん全員分

俺が部屋で準備をしていると俺の双子の妹、文月が入ってくる

「どうしたの？」

文月が俺の部屋に入ってくることは別に珍しくないけど一応用件を聞く

「別にたいしたことじゃないんだけど……。今日学校終わった後空いている？」

文月は少し顔を赤らめて言う

「うん、空いてるよ。」

そう言った瞬間文月の顔がパーッと明るくなった

「じゃあ学校終わったら行くから。」

「分かったー。」

俺はバッグを持ち上げながら言う

「じゃ、学校行こか。」

幼馴染と登校（前書き）

なんか適当ですね、今回…orz
最後とか台詞多目すぎる

幼馴染と登校

「いつてきまーす。」

と、俺と文月の声が重なって玄関に響くが、俺ら以外はもうみんな学校へ向かった。5人は小学校、俺と文月含めて4人は中学校、後の3人は高校とゆうシステム。いや〜もう学校制覇しちゃってますね！

いやでも後大学あるか…。ハーバードとか

ところで何で後の2人と中学校に行かないのかだつて？

一人は部活の朝練、長姉は他の友達と行ってるから。でもたまに4人で一緒に行くことも無いこともない…

だからほとんどは俺ら2人で登校さ。いやでも何かもう一人いるんだが……まあいいでしょう！

「えーと、かぎかぎっと…、お、あつた。」

俺は我が家の人間にしか分からない、金庫からかぎを取った。そして2個かぎがついてるドアを閉める

その後ちゃんと閉まってるか確かめるために、取っ手を引く

開かないからちゃんと閉まってるみたいだね。最近物騒だからみんなも気をつけなよ！

とかか思いながらそのかぎをバッグにしまい、文月に

「じゃ行きましょか。」

と言って俺らは歩き出す

俺は門を開ける。そして通る。文月も通る。はしもとある橋本徹

「どうしたの？水無月？」

文月が少し戸惑いながら尋ねる

「え？ああ、何でもないんです。ささっ、早く学校に行きましょ。」

「

俺は何も無かったのよに振舞う…

すると、文月も深く聞き込まず、これ以上何も言わなかった。まあしょうもない事ですしね

それから俺らは何も話さず学校へ向かった

しかし、何かを忘れてるとゆう感じがあって気持ち悪かった

それは学校まであとちよいと言つところで分かった

いや分かりたくなかった

でも分かってしまった

そのVTRをどうぞ！

歩く度に何か賑やかな声が聞こえてきた

それはもうすぐ学校に着くとゆう合図でもある

うんうん、こつゆう登校好きだぞ俺は

俺が独りで頷いてると、前に一人の少女が現れた

「誰が少女だ！？私は中学生だ！」

「中学生って十分少女じゃねえか！！それにモノローグ読むな！」

「あんたの心なんて、お・み・と・う・し。」

「そんなんで『ズッキューン』とかなるとか思ってたねえか!？」

「ま、まさか……。」

「動揺してるやないの!?!」

「……テヘッ。」

もう着いていけん！！やめだやめだ！わしは帰る

「待って！」

「なんだ？このわしにまだ用はあるのか？」

「そっちは学校。」

「分かってて行ってるんだが。」

「ありやりにや。」

「いつの！？」

「昭和75年。」

「最近！！平成に直すと平成20年ぐらい！！」

「なんで今日私の家来なかったのよ！！」

「急に！？」

「本題忘れてただけなんだからね！か、勘違いしないでよ！？」

「シテナイガ。」

むしろしたくない

「まー、何て失礼な！親の手が見てみたいよ！！」

「手!?!」

「えーいうるさいうるさい!?!何で今日来なかったんだ?」

「…忘れてたっす!」

「この野郎!いつもの事だろうが!何で忘れた!?!」

「貴様といるところがゆづ状況になってしまっからだ。」

「こんな状況ってどんなんだ?」

「んーと、台詞多目、コントっぽくなる、他の人が空気になっちまう。」

例えば今いる文月さんとか

「……………」

ん?もしかして怒ってるのか?少し言い過ぎたか。いやあれでか?まあとりあえず誤らなければいけないな、こりゃ

「……………」

「あ…、亜守華さん?大丈夫ですか……………」

「ありゃりゃりゃ。」

……………はい学校行きましょー

「待つて、自己紹介だけさせて！私の名前は西原にしはら亜守あすか華。中学2年生の元気な女の子！明るくて、かわいい私だけど、一つコンプレックスがあるの。それはね、身長が低い事なんだ！でも私はこんなことじゃめげない！だからみんな。こんな私を応援してね！」

「えー、自分で言う！？それに応援求めてるし、自分誉めてるし。うーむ、こうなったら……。」

「うん、それしかないね。せーの……。」

「「ありやりやりや。」」

横で見てる文月と生徒さん達の眼が痛い

男友達と会話（前書き）

テスト終わりやした

男友達と会話

俺ととのコントを終えた幼馴染と文月と一緒に学校に着いて、門をくぐる

そして少し長い校舎までの道を文月と喋りながら歩く。 亜守華？あいつとは今日はもう喋りたくねえ

その道のゴールは靴箱であり、生徒会じゃない体外の生徒はその終着点に向かう

俺は自分のクラスのとこの靴箱、文月と幼馴染はその隣の靴箱で靴を履き替えて、2年の階である4階まで一緒に約束をした

そして俺は自分のクラス2-2の靴箱に向かう

上靴をロッカーから出そうと、一番下にある扉を開けた時に聞きなれた声がした

「よお、水無つち！」

俺は上を向くと、予想通りの人物が「ハアハア」言いながらいた

「お主は朝から元気ですのお、わしゃあ腰が痛いわい。」

俺は腰を屈め言う。すると、こいつも腰を屈めてノツてくる

「おお、お主もか。わしも朝から間接が痛いんじゃ。」

この俺のノリに何の動揺もなくノツてくるのは、同じクラスの「海崎^{なつき}夏希^{なつき}」だ。俺がいつも一緒にいる奴らの中では一番ヤンチャ。穴も開けてるし、髪も少し染めてる。でもかわいい系の顔をしており、いい奴でお世話好きなので、学校ではそんなに恐がられることはない

「おおそうかそうか。やっぱり歳は取りたくないのお。」

俺はこのノリを続ける

「んじゃんじゃ。若いときはよかったのお。」

夏希も続けてくる。くそ！このままじゃ終わらない。かといって俺から言い出したのに俺が終わらせる訳にはいかない。うゝむどぐすれば…

とか俺が考えてると、横でむっちゃ引いてる双子の妹。……クラス行きましょか

亜守華が来るのを待って、俺は文月と亜守華と夏希を連れて4階に向かう

4階に着き、2・2の前に来た。文月と亜守華は隣の2・3の為、2人とはここで別れる

2人が教室に入るのを見て、俺らはクラスのドアを開け入る

カバンを置き、クラスを見まわすと、いつもいつしょにいるが3人いた

俺はそこに向かう。すると、俺の接近に気付いたのか、「おはよう。」と挨拶をしたり、手を振ったりした

で、俺がそのグループの輪に入ると、夏希も入ってきた。これでのもののグループは揃った

そして会話が始まる。まず最初に発言したのは結構茶髪のイケメンさん

「…君らっていつも来るの遅いよね？カバ？」

とゆうツッコミのようなボケのような、よく分からない事を言うてるのは、学年で2番目に顔がいい「紅葉こうば 秋梨しゅうり」。めちゃかっこいい名前。茶髪なのは遺伝とかなんとか…。こいつは声は小さいがすごく人気がある。人気があるのももちろん女子だが。でも一応男子の友達はある。俺らとか

「しょうがなくね？だってオラ朝食作ってるし、弁当作ってるし…」

俺は指を胸の前でツンツンしながら答える

「…水無ちゃんは分かった。…あんたは？」

秋梨は夏希を見る。夏樹は「ふん！」とでもゆうような顔をして

「俺は一分あればいけるからな。適当に家を出るんだ。」

「てめえの家はこっから1キロあるじゃねえか!」

このツッコミを言った人は雪居冬時せいでついでとゆう。顔は中々整っており、眼がねをしており、この学校では『眼がねの王子』とかなんとか呼ばれてる。この軍団の中では雄一ツッコミしかない。逆に言えばボケない。後は一人っ子ってとこかな

「フッフッフ、私ならいけるのさ、わっはっは。」

「じゃあ、仮に行けたとしますよ?でも信号とかで足止め喰らうだろうが。」

冬時が正論を言う

「そんなのは……、無視!!」

こゝ、こいつ…ダメな方で輝いていやがる!

しかしその輝きを止める、いい輝きを持った人が言う

「ダ、ダメですよ!信号はちゃんと守らないといけませんよ!」

この敬語で話すいい子ちゃんは、桜木春知はなぐみはるち。すんごい童顔と喋り方で学校では『男の中の美少女』なんてゆうカマみたいな呼び名だ。この呼び名は聞いただけじゃその人をカマだと思ってしまうが、姿を見ると、そんなことは微塵も思わなくなる

「信号?何それ?」

「…赤と黄と青がある。」

おお、シンプル

「…知ってるけどね。」

と、夏希はベロを出し、かわいい子ぶる。一体何なんだ、こいつは

「むかつくなあ、てめえは。」

「僕もちよつとムツと来ました。」

怒ってはる。夏希はどうすんだ？

「そ、そうだぞ、水無っち。」

え？なんか俺に振られたんですけど？

「…水無ちゃんそれはダメだよ。」

ノリに乗らなくていいんだよ？

「…たく、てめえは加減ができねえのか？」

冬時さんも？

「ダメですよ、水無月さん。」

春ちゃんまで？

く、くそ！もういいよ！

俺は教室から出ようと走り出した

「待って！」

しかし、それは止められた

「もうチャイム鳴るよ。」

「止めた理由しょぼっ！いやまあ大事だけでも。」

時計を見ると、チャイムが鳴るまであと一分ぐらいだった

「いやいや、そんなことはどうでもいいんだ。それよりもこの話をどうまとめるかだ」

俺が何かを察し提案する

「じゃ俺がまとめる！」

「おーいったれ〜。」

「…やったれ〜。」

「やっちやっってください。」

俺以外の奴らのはやし立てる

夏希は大きく息を吸った

「キーンコーンカーンコーン」

「君が言うの!?!」

男友達と会話（後書き）

なんかグダグダ…orz

お昼休みの弁当

「お疲れッス、先輩！」

「おう、サイダー持ってこんかい。」

「やっぱ炭酸はサイダーだ！」

「了解ッス、先輩！」

「あ、俺コーラ。」

「おッス、先輩！」

むむ、冬時君！コーラって、サイダーの敵ではないか！

「…俺CCレモン。」

「おッス、先輩！」

炭酸続いてますね。次は何だ？フ○ンタか？

「じゃあ僕は、…オレンジジュースで？」

…ん？オレンジジュース？オレンジソーダーとかじゃなくて？なんだこのおっとりさ？男は炭酸だよ！

「おツス、先輩！じゃ、行ってきます！」

「行ってこーい！」

と、夏希さんが自動販売機にジュースを買うべく、人で混んだ屋上から出て行く

今の内に状況を説明しとこうかな。今は昼休み。12時半から1時20まであつて、弁当を食い終わった人から運動場などで遊ぶみたいな感じ。で、俺らは弁当のベストスポットである、屋上にいる。屋上が人気な訳は普通の理由で、景色がいいからだ。でもさっきも言ったように、屋上はベストスポットだから人がたたくさん。だがしかーし！さっき述べた理由にも関わらず、俺らは毎回この屋上で食べれる。何故ならチャイムが鳴る5分前に、ジャンケンで負けた人が先に行って、場所取りをしているからだ。いいのか？って思うだろうが、いいんだよ別に！だってほぼ毎回夏希だから……

俺が説明してる間に夏希さんが帰ってきた

で、俺らの元に来て、一人ずつジュースを渡してく

俺はサイダー、冬時はコーラ、秋梨はCCレモン、春ちゃんは……オレンジジュース

夏希はと言つと、細長いビンで、中にビー玉が入っているあの……ラムネ……！

ま、まさかだ……一応炭酸だが、懐かしさとゆう物がやばい。匂い

として漂ってくるよ！

「お疲れです。夏希君。」

「くく苦勞く。」

「…遅い。」

今ので！？2分位だったよ！

「くくくそく。今の俺じゃこれが限界だ。もっと…、もっと強くな
らなければ……！」

夏希は拳をグツと握り誓う。これ以上言つと話変わるから放っておく

「じゃあ食べるか。」

冬時が切り出す

「そうですね。」

みんな手を合わせて

「」「」「この世の全ての食材に感謝して……、いただ」「」「

「ちよつと待ってー……！！……！！……！！」

俺が全身全霊全力で止める

「なんで止めんのよく水無うち。」

夏希さんが何事も無かったのように言う

「君い！著作権申し立てで排除されるよ！！！！」

「まあまあいいじゃないの、とりまお腹減ったから食お。」

夏希がお腹を押さえる

「…も、もういいよ。僕の負けだ。君の空腹に負けだよ」

「ではでは、気を取り直して……」

「」「」いただきます！」「」

俺含め、みんな弁当のフタを開ける

みんなは自分のを見てからみんなのを見る

俺の弁当はいたって普通。たまご焼きなどのポピュラー

冬時はまさに日本の弁当って感じ。ごはんの上に梅干……！

秋梨は野菜や果物中心。肉1・ごはん1・野菜2、5位の比率

夏希は買い弁。「あつつあつつ弁当」の「からあげ弁当」だ

そして一番驚いたのが春ちゃん。今人気とかゆうか流行ってる「デコ弁だ。いや、キャラ弁だ。国民的キャラクターの青猫？だ

夏希が春ちゃんを見て歓喜の声をあげる

「おおー！！春ちゃんの弁当きれーい！もはや芸術だよ！国宝だよ！！！！よし、みんな！今から総理に献上しに行くぞ！！！」

「てめえはうつさいんだよ！はしやぎすぎか！」

冬時が殴りながら、夏希の興奮をなだめる。でも冬時もそのすごさに少し興奮してるみたいだ

「こ、国宝って…。なんか食べにくくなっちゃったんですけど…。」

春ちゃんは食べたそうに箸で挟む動作を繰り返している

「そ、そうだな。春知ごめん。」

冬時が興奮を抑えて言う

「…また見たいから、また作ってきてよ。」

「てか、これって誰が作ったの？」

俺が問う

「あ、分かったー！まさかまさかの春ちゃんか？それとも普通にママさんか？」

おおー、春ちゃんだったらすげーな

「えーとですね、僕と……お父さんです！」

春ちゃんが言った瞬間、周りの人には聞こえてないはずなのに屋上
が静まった

「……え？本気で言ってる？ジョークだよね？」

「いえ、本当ですよ？家事はどちらかと言つと、お父さんがやりま
す。」

「も、もしかしてお父さんって童顔？」

「うーん、童顔かどうかは知りませんが、昔は女の子と間違えられ
たことがあると言っていましたよ。」

「……はっ！この瞬間みんなは分かった

春ちゃんの女要素はお父さんから来てるという事が！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5049y/>

将来の夢かぁ...まぁ適当でいいでしょ.....

2011年12月2日22時48分発行